

## 夏の宵宮

蝉時雨が鬱陶しいほどで、そんな日の登校日、オレはよりによつて応接室で骨董の皿を割った。

「……」

雲雀は信じられないものでも見たような顔つきになり、しばらくそこに佇んでいた。やがていつもの能面じみた無表情に怒る、という感情を乗せもせずそれこそ喜怒哀楽といった心の動きそのものを忘れてしまったような顔でそつとその欠片を拾い上げて、困ったね、と静かに言った。

「ご、ごめんなさい……」

ツナのせいじゃねーぞ、と室内で唯一涼を運んでくれる扇風機の前でリボーンが言ってくれる。実際に皿は分からないけど、ツナが細心の注意を払ってその箱を持ち上げて拭き終わった机の上で、ゆっくりとこれまでの戒めを解くかのようにぱりんと音を立てたのだった。

「オレが見てたが、普通じゃねえ割れ方だった」

腕を組み、ひっかかかのような言い方をする。

「そうなの？」

雲雀は当番に当たった三人を見た。左から山本、ツナ、獄寺、と並ばされている。

「割れた音がしたとき、オレと小僧は一番箱に近いところに居たんだぜ？　窓拭いてたから。獄寺はゴミ捨てに行つてたし、ツナはバケツの水替えようとしてたんだよな？」

「う、うん」

山本の言葉に頷いた、それは本当で嘘も誤魔化しようもない。

「……」

リボーンは黙つてそれを見ている、ちらりと窓を見、雲雀の手にある欠片を観察するように見詰める。何かをじっくり考えているようだった。

「骨董なんだろ？　この暑さで干上がったかして勝手に割れたんじゃないやねえ？」獄寺が言う。

「簡単には割れないものだ」

きっぱりと雲雀は返すと、山本をじつと見た。

「山本武」

「お、おう」

「見てたんだろ」

「いや、オレも窓拭いてたから良くは……」

滅多にない雲雀の様子に山本はたじろぎ、あたふたと手を振る。暑いからってだらけたわけじゃない。そして、ぶつかつてもいないし、誰から何かしたわけでもないのは確かだ、と続けた。つまり、外的な要因はなかったと、ツナもそれは覚えている。

皿は白っぽい木の箱に寝かされるように収まっており、机の上に置いてあった。蓋は開いて立てかけるようにしてあったから見れたのだ。片手の手のひらほどの白くて丸いきれいな皿で、底には竜のようなもの——つまり、鱗があり、尾鰭のような

ものを持つ細長くうねりのあるもの——が黒とも藍とも言えないような濃く深いひと色で描かれていた。魚の一種なのか分からないけれど生きているようで、水が注がれさえすればいまでも動きそうに思えた。それを慎重に持ち上げて埃っぽいという肌の表面を拭き、蓋のところも同じようにして戻す。自分はいちよちと雑巾を浮かべたバケツを持ちドアを開けたところで、リポーンを肩に山本は鼻歌を歌いながら高い方の窓を拭いていた。扇風機は誰もいない場所へ風を送っており、そこへ乾いた破壊音を聞いたのだ。最初はそれが何の音だったのか分からないくらいだった。

「でも割れた」

感情もなくひんやり響く雲雀の声は否が応もなしにツナの胸に突き刺さる。落ち着かなげに皿を見、その先の空間を定まらないような目で見据える。まるで狼狽が雲雀を支配して、彼自身にも構ってられないとそういう風に見えた。

「弁償か？」

リポーンの言葉がずんとくる。

要らない、と間髪措かず返すと、そんなのはいいんだ、と呟くように言って雲雀は手元を見る。袖薬に光が弾けていた、ツナは怒りもしない相手を前にはらはらとその様子を見ていたが、居たたまれないのと、雲雀に申し訳ないことをしたとそればかりを悔やんでいた。

「すみません」

「十代目が謝ることはないですよ」悪くないんですから。だいたい、なんでそんなもんが出てあるんだ、と不貞腐れ

たように獄寺は言う。しかし、雲雀のいつにない様子に強くは言えないらしい、居心地悪そうにけつと吐き出す。

雲雀は間をおいてやつぱり静かに返した。

「明日の本宮で必要なんだ」

「神事に使うんなら、代用とかねえのかよ」

「代わりを持つているのは…一人しか僕は知らない」

珍しく言いよどむ、殊更胸に疼いた。

「すみません」

「君が悪いわけじゃない」僕のみすだ。

「窓から反射したかした光がツナの背中に刺さったんだ」

「——え？」

少なくともオレにはそう見えたな、とリポーンは言って雲雀を見る。雲雀は、光、と一人言ちてから何かが思い当たるのか、黙り込んだ。

「もしツナが狙」

「赤ん坊」

リポーンの言葉を遮る。

「君には関われないことだ」

「関われない？」

鸚鵡返しに獄寺は声を上げ、胡散臭そうな顔をする。

「どういうことだよ？」

「今年は陰祭りだ。手順さえ間違えなければいたしたことには

ならない」だが。

雲雀はぼつりぼつりと虚空に描かれた念仏でも唱えるように

言うとその息を吐く。

「間違えると途轍もなく、深い」

「……？」

「沢田」

「はい」ごくりと唾を飲み込む。

「鬼ごっこだよ。僕が蓋を開けて置いたのを、君が触って置いた」

「鬼ごっこ？」

思わず三人で顔を見合わせる。リボンも分からないという顔で腕を組み雲雀の説明を待つが、硬い沈黙があるだけで言葉は続かない。

「ヒバリ」説明してくれ。

雲雀は首を横に振る。

「個人的なことだ、説明なんかしない。ただの気紛れなんだから沢田が行って代わりを受け取って帰ってくれば、それでいい」

「はあ……」

「こつちを持って行かなくていい、相手には何も渡さない方がいいんだから」

「……」

「取りに行くだけでいいの？」

山本が確かめるように問うが黙殺される。獄寺が鋭い視線を向けたが、風紀委員長にとつては蚊ほども感じないらしい。

「気紛れに呼ばれたのが僕から沢田に移っただけのことだ。だからあの男に君が会ってくるのは——」

と雲雀は破片を箱の中に戻すとツナを見て言う。雲雀の、瞬きも少なく、緩やかに流れを変える目の中には、ツナがこれま

で見たこともないような冥い闇が潜んでいるような気がしてぞくつとした。

「君だ」

内容を飲み込むまで少し時間が掛かった、なんとというか輪郭の見えにくいぼやぼやした話は嘘っぽいのに拒めない強さがあり、圧されてしまう。ぎこちなくやつと頷けた。

「…鬼なんだから」

そのときにやつと雲雀に表情らしきものが戻った、けどあまり良い兆候でもなさそう。僅かにだけでも険しく、何かに対し嫌悪を示すような顔がいいわけがない。聞かない方が良さそうだな、とリボンは呟いた。

明日使うものだから急がなければならぬ、と言われた。だからツナは学校帰りに寄ることにした。獄寺や山本は付き合うと言ってくれたが断った、学校からは少しかかるけれど一人で行けない場所でもないし、もし怒られるとしても獄寺や山本を巻き添えにはなく、自分が向き合わなければならぬと思うからだ。

皿はもともとどうにもならなくなっていたのかも知れない、息を吹きかけただけでもその部分は割れる準備ができているほど脆く、ツナが上下させたのをきつかけにしてそうだったならやつぱり触ったりした自分が悪い。そしてマジで、と嘆けるほど自分の運も悪い。落としたならともかく、間をおいてばりん

はないだろう。

「でもなあ…」

雲雀もぶんすか怒るかと思いきや反応は穏やかというか困惑をとおり越し、消沈といったような具合で、見ている方がもつと不安になった。空気を伝って彼の鼓動と狼狽ふりがうつるような気すらした。雲雀の様子もそうだし、することも奇妙というか、どこか儀式めいているというか。

「そういうものなのかなあ」一人言ちる。

『代わり』というから皿を交換するのかと思っていた。しかし雲雀はさる人物に会って受け取ってくればいい、と言った。自分が行くこと、こっちは持つて行かなくていい。

——『鬼』なんだから。

と、無言で斜め上を移動する影に気付く。

「宿題は帰ってからちゃんとやるからさ、リボーン」

「気にすんな、オメーがちゃんと行くか見届けてから帰る」

「逃げないよ」

「ヒバリ絡みだからな」

「……」

涼しく言う家庭教師を見上げる。まるで何かをふくんでいるような言い方だ。

「その家で割つちまった代償としてのシゴキを期待してもいい」

そうしたらオレは家庭教師<sup>カチキョウ</sup>だから見物だな、と続けてしれつと嘯いてもくれる。いくら何でもあるわけないだろうと返したが自信はない、そんなことはないと思いたい。

風が背後からざあつと生ぬるく吹き抜け、近くの樹に止まったらしい蝸の声が聞こえてきた。この通りをまっすぐ行けば寺だが、用がある場所はその手前を折れ、横手の道を進まなければならぬ。この辺りは古くからの家が多く、道も細く入り組んでいる。

「…あいつの急所なら」

二輪車が辛うじて通れるほどの、道というよりも近代的なビルと寺社の隙間の方が正しい狭い通路だ、フェンスとブロック塀に挟まれたそれは舗装されておらず、白っぽい乾いた土が剥き出しのまま続いている。

「オメーがちゃんと見とくべきだからな」

「リボーン？」

三叉に分岐している、どっちだったっけかと立ち止まって書いて貰った地図を探しているととととと行きやがれと蹴り出された、苔生した庚申塚にぶつかりそうになる。

「あのこんもりしたこの家が」

一部しか見えないが、周囲からして空気が違うような佇まいだ。

「そうみたい」広そうだなあ。

巡るようになった道はいつの間にか緩い坂になっていて、ちらほらと人家も、通りに面しては自動販売機や商店らしきものも見えるのに目にする緑が多いせいとか、昼間なのにそこだけはずっと夜の気配を抱えているように見えた。

蝉の声はいっそう大きくなったが日陰は歩くのも楽だ、息を吐く。どこからか蚊取り線香の匂いがしていた。

「じゃ、行ってこい」

「あ。うん」

「メシには遅れるなよ」

面倒になったのかりポーンは背を向ける。遅くなくてもオレのは残しておいてよ、と言ったが後ろを振り返っても変幻自在な相棒とともに家庭教師様は影一つ見えなくなっていた。

ひとめ見たとき雲雀だと思った。

「あ、初めまして」

ツナは頭を下げる。門扉を入り、敷石を辿るとまづ庭だった。表札もなく、訪いを告げても反応がない。土地の地主といったような風格がある家は緩い坂をあがりきったところにあった。坂道の途中から竹藪が続いていた、汗を拭いて振り返るということを何度か、する。黒く湿った土に力強く生えた竹の並びは葉音や蝉の鳴く音がどこへともなく反響したり、吸い込まれているようでどこか遠近感を覚束なくさせた。よく手入れされた場所だが、ひとけもなく、静かで心細い。

いくつか株を植えたのだろう、朽ちて乾いた紫陽花が濃さだけを増した枝葉から突き出ている、それに埋もれるようにして大きな水甕が置いてあった。

「…君が」

その中でも見るようにして着物姿の男が立っている。浴衣ではないようだが素足に下駄履き、濃い色なのにどこか涼しげで、季節でも間違えているのじゃないかと思えるくらいだった。

蝉の声もいつしか止んでしまった。

「えっと、その…」

ツナをまるで唐突に突き出されたものを鑑定でもするかのようになつと見ると、両の袂に手を入れ、よく来たね、と表情もなく何かのついでのように言う。

「すみません」

つい謝ってしまう、ああ本当にあの小さくきれいな皿は割れてしまったのだ、とつくづく感じた。何か底の知れない冥いものを抱え、危うい何かを宿しているような目だ、とも。

「話は聞いている」

と、男は気にもしていない様子で告げるとついて来いとも言わずに先に歩いていく。花を茶色くさせた紫陽花を過ぎれば万年青の鉢があり、斑の流れがあるのやないものが艶やかに色を放っている。水の流れる音がして、通るところ以外はびつしりと吾が生えていた、実をつけた低木やら気を遣いながら進んで、なくなつたと見るとすぐそこは縁側で、池も何も見えない、井戸のようなものはあつたが桶もなく、櫓には蜘蛛の巣が張っている。蓋がしてあつて辺りに生えた雑草といい、もうだいたいぶ使われていないようだった。

「あの、何を、見ていたんですか？」

男は魚だ、と応える。つがいで水甕にいるという。

「……」

突つ込めばヤブ蚊の餌食だろう膝丈ぐらいの草が向こうに鬱蒼と茂っていて、高い木もある。自分たちが居てもいい隙間は面積からして少ないようだ、広いのだから狭いのだか分からない。

ふと眩しくて見上げれば傾いた日を背に屋根よりもひととき高く、白い張り出した壁のようなものがある。屋根を支えるにしては奇妙な形で、あれはたぶん来る途中に見たなどツナはそちら気を取られていた。

「——っのわ!」うぶ。

うっかり足を滑らせ、男の背中に顔を当てていた。

「なに見てるの」

男の顔は逆光でよく見えなかった。

「すみません。あの、あれは? 出窓とか?」

「卯建」

「『うだつ』?」

実際に背中に当たったのにどうも触れた気がせず、何とも言えない感触だけが残っていた。どこかざわざわする、なんだろう、暑いのに寒いような。

「あがるとかあがらないとか」

相手は気にもとめず詰まらなそうに言ってくあと欠伸をする。

男は二十をいくらか超えたか半ばくらいで、顔といい、雰囲気といい、雲雀とよく似ていた。強そうで鋭そうなのだが、ただ少しばかり影が薄いように思える。気を抜けば闇に溶け込んでしまいうような、いまにも透けてしまいうような儂さがうかがえる。

「僕は代わりを用意した、きみは何を持ってきたの?」

「……」

雑に下駄を脱いで縁に上がるとツナを振り返る。

「上がらないの」

「え、いや……」

つくねんと香脱ぎ石の横で立つしかない、縁側に並んで吊り下げられてる簾が涼しげだった、誰が置いたのか蚊取り線香が煙を立ち上らせていて、茜色の光をうけ、とても居心地が良さそうな場所だった。だけどなんだか彼は自分の家なのだから当たり前に入っているいいが、自分には入ってはならないような気がした。

「何も持つて行かなくていいと聞いたので」すみません。

呆れたね、とその人はくすりと笑った。

まるで結界に守られた人だ、と薄ぼんやりしてきた中でそんなことを考えた。

「ぼやぼやしていると帰れなくなるよ」

「あ、はい」

「奥の室にある。風に当てるぐらいならいいが、この時期の光は毒だから」

そんな事を言っただけだと歩いていく主の後ろをツナは歩いていった。思うほど広くはないが奥というだけあって長い廊下を曲がって回って、突っ切って、相手の歩みが早いものだから振り返る間もなく閉め切られた襖を見、障子や中庭を見て、細長い部屋に通された。昼間の熱気がまだ凝ったように残っていて、むっとする、唯一の涼は廊下側にある釣り窓だが、あることが却って不釣り合いに見えた。

飾り気のない床の間に黒い箱がのせてある。

室内の明かりは乏しく(それはこの骨董の皿が箱ごとで光を

嫌っているからだろうとツナは思った、昔風の角行灯が一つ、花の模様を透かしてゆらゆらと舐めるように炎を揺らしていた。そのせいで影もどこか歪になる。

「夏はいつまでも暑く、冬は凍えるほど寒い」

男は慣れているのか涼しい顔で言うが、ツナがどつと汗が吹き出していてもな応えも出来ない。

「道楽者はここでどとらを着込んで火鍋を囲んだりするけどね」

「え？」

それ、取っつておいでと促されツナはどとと畳の上を歩き、それを手にする。応接室にあつたものよりも重かつた、箱かも知れない、黒い漆塗りだ。今度こそ割らないようにと出来るだけやさしく、掬うようにしたが持っているだけで緊張したので実際はどうか分からない。

「——」あれ。

持った瞬間、すつと空気が流れた。畳の下からひんやりとまるで、冷たい水でも湧いたかのように室内が涼しくなる。

鬼が逃げたかな、と男は首を掻くように横を見遣りながら嘯く。

「もう夜だ」

言われて気付く。建物の奥まったところだけが暗いのかと思っていた。

男の視線の先には丸窓があつて、外が見えるようになっていた。なるほど、もう暗い。ついさっきやつと西の空が赤く染まってきたと思つたのに、空気も昼の熱をふくんで暑いままだった

のにいつの間にか風も変わり、すつかり明かりが必要な景色と色合いになつてゐる。

「ごめんなさい、長く居たみたいで」

うんと男は言つた、そういう容赦のなさも雲雀に似ている。

「過ごしやすくなつたらう？」

確かに座敷の中はクーラーを効かすよりもつとやさしいしつとりとした空気に満たされ、居心地の良い空間になつてゐる。

「そうですね」

解せないのに、落ち着いてしまつてゐる。

箱を抱くように持つた。雲雀に明日、無事に届けなければと思うとどとものんびりしてられない。早く帰らなきゃ。

「僕は食事をするところだけど、君も呼ばれるかい？」

「いえ、ご迷惑ですから」

「それともあれに何か言われたの？」

「何も」

首を振る。ぞわぞわするのだ、骸とも違ふ、神経ごとなかに得体知れないものに絡め取られるような。このまま居たら男というより、この家全体が持つ甘美な毒のようなものに侵され、麻痺してしまふ。

「だけど僕は暑い中、折角訪ねてきた君に茶一つ出してないし、君は君で何も持たず来て必要なものを受け取つたらすぐに帰るという」

う。詰まつてしまふ。

「帰りは心配しなくて良いよ」

——りーん…。

風鈴の鳴く音がした。

沢田綱吉は朝一番に雲雀の元へやって来た。そして、きちんと行つてきて受け取つたと包みを差し出した。

「……」

これでいいでしょうか、と震えがちな声を出す。

「それで、あの…」

「陰祭りでは神酒を一つの皿で奉ずる。本例祭は陰陽の二つを並べて用意するけど、今年の陰祭りは月食があつたから陽の皿を使う。陰と陽の皿には虹蜷がそれぞれ描かれている」だから対になっている。

「こうげ…?」

「虹。なんでも雌雄の龍だから、雄をコウ、雌をゲイというらしい」

ああ、そうなんですか、と悄然とした声で言う。続けてすみませんでした、とまた頭を下げる。

今回のことは沢田綱吉に非がないのは明らかだった。見てはいないが、彼が落としたわけでもない、箱を持ち上げて置いて戻したという行為はいわば押されるのを待っていたスイッチに触れてしまっただけで、休みでいづらか学校に来ない日があつて少しざらついた机の感触が不快だったからと登校日ついでに清掃させたのは雲雀だ。

「それで、その…割れた方は、大丈夫なのでしょうか…」

「回ってくる」

沢田は少しほつとしたように息を吐いた。

「ヒバリさんはその『ヨウノサラ』を持つてるんですね」

持つと言うより、在ると言つた方が正しい。割れても盗まれてもきつと回ってくる、そういう因縁が雲雀とそれにはある。

「ジャッポーネの神事はわからねえな」

と、突然に声のした方を見れば当たり前に赤ん坊がいる、縞の水着に緑の浮き輪を腰に、額を巻くかのようなサングラスはまるでバカンスといった姿だ。

「神事というほどでもないよ」習わしだ。

「ちよつ、リポーン」

「しかしこれも暑いな」

青ざめた沢田が意外な早さで赤ん坊に寄り、こちらをちらちら見ながら、何だよ、ヒアンキとプールに行くつて言つてたら、と話す声がまる聞こえだった。プールというのはここなのか？

「昨日はツナが世話になつたからな」

「……」

「や、いえ、戦うとかはしてないです。なんか送つてもらつたりしたみたいだから」

先手を打つようにぶるぶると手と首を横に振る。

「みたい?」

「玄関に箱抱えたままぶつ倒れてた」

「箱も中身も無事です!」ご心配なく!

顔を引きつらせ叫ぶように言う。おおかた器用にも蹴つ躓いたとかそんなところだろう、それでも箱は死守したと。そもそも



もそんな宣言は要らない。

「あれに何か渡したりしたの？」

沢田はさらにぶるぶると腕と首を振る。やや強めに言われたこと以外のことはいしませんよ、と全身で訴えてからおおやというように首を傾げて、そつと雲雀を見る。

「何も渡してません」

と、どこか気の抜けたような声で続けた。

「緊張はしたけど」

「…そう」

机に置いた漆黒の箱を見た。容れ物の詠えは異なるが、対となるものだ。障りがあつて一つにしておくわけにはいかないからと別々にされている。雲雀が持っていた方もこちらも骨董としての価値は知らない、知っていたとしてもどうこうする気もないし、そもそも古物には興味が無い。ほとんどの期間を蔵や戸の内側に仕舞い込まれていただろうに、その古さや蘊蓄を聞かされてもだから何だと思つてしまう。むしろ懸念するのは由縁の方で、持て余すようなこともある。

それでも二枚の皿は取れないシミのように在るし、損なつても回つてくる。

「家の人がヒバリさんに似てたから」さほど見苦しいことはしてないよ。

「そうなのか？」

沢田は雰囲気とか似てたと、赤ん坊に顔き返してから無垢な目を向ける。

「あの人は誰なんですか？」

言いたくない。無視しようと思つたが、それが嫌な笑いをするのが頭に浮かんで苦々しくも口にしていた。

「…に、近い…」

「え？」

「親戚。兄のようなものだ」

本来なら関わりたくもないが、断ち切れないのだからしょうがない。おそらく相手も同じ事を考えているに違いない。

そうですか。沢田はそれ以上は詮索せずどこか納得したように頷き、赤ん坊も気が済んだのか呆気なく窓から、それこそダンプでもするかのように出て行く。

「……」

「オレたちは今夜の宵宮に行きますが、ヒバリさんは？」

影祭りだろうが、そういう賑わいには遠慮も何もない。本祭と同じように境内に屋台などが立ち並び、小規模ではあるが花火も打ち上げられるため参拝客が引きも切らない。翌日の本宮が本祭よりも地味になるくらいだ、人々にとつて祭りらしいのはいつだつて宵宮だ。

「群れるのは嫌いだよ」

今年は催しもあると聞いた、風紀委員の仕事もある。咬み殺す輩は鬱陶しくなくらいの適度な力と量であるといい、そういう楽しみがあるので群れも少しは我慢するが。

「ひとでは多い、せいぜい迷わないことだ」僕の手を煩わせないでよね。

沢田ははい、と応えてから小さく笑う。

「似たようなこと言つてましたよ」ちよつと違うけど。

誰が。聞くまでもない。

「人が多くてまどうから気を付けろって」

「…そう」

近く、蟬の音が聞こえてきた。白かった日差しもやがて濃く、強くなる。

「沢田」

手を伸ばす。相手は瞬時驚いたような顔をしたものの、すぐさまぎこちなくだが笑った。

「はい」

握り返して雲雀が倒れかかるように抱きしめてくるのをあたふたと受け止める。そこにある鼓動や感触をただ確かめたかった。

「つて、汗臭いですよ、オレ」

「うん」

鬼となり、彼は傷一つ作らずに戻ってきた。言いつけ通り何も相手には渡さなかった。息を吐く。そうして若干の不快感が混じるのを感じ、引き離す。

「暑い」

そりゃ夏ですから、と痛がゆいような顔を沢田はする。

ひとの濁流だと思う。

祭り提灯に煌々と照らされた参道をうねり歩くさまはまるで山の隧道にでも人が流れ込んでいるようではないかと言ったのは誰だったか。

——深い、黒です。

「…ああ」

もうずいぶん前に雲雀の前に皿を持ってきた骨董屋の主だ。確か、それから暫くもしないうちに死んだ。

「ようヒバリ」来てたのか。

肩を叩かれ、振り向くと山本が立っている。誰にせがまれたか昔風の白い狐の面を頭につけ、手には金魚だ、赤いのと斑入りの和金が疑いも持たず狭い袋の中で泳いでいた。

「ツナ見てねえかな？ 一緒に来たんだけど人が多くて」

「知らない」

言ったところで、今度は浴衣を着た赤ん坊がどこからか来て山本の肩に乗る。

「迷子を捜しに行つて迷子になったんじゃ世話ねえな」

まったくだ。

「騒ぎを起こすようなら咬み殺すよ」

山本はしねーけどさ、と諦めたように息を吐くと見付けたら大階段の下にいるからって伝えといてくれ、と行つてしまった。姿はもう人に紛れて見えない、それでも声は聞こえてくる。

「リボーンさん、アホ牛見付けました」

「離せえ、バカ寺。ランボさんはあれやるのー！」

「黙れ。だいたいめえが…」

「でもツナくんどこ行っちゃったのかな…」

「ツナはランボさんいるのに、行っちゃったんだもん！」

ぴたりと足が止まる。

「……」

それはお前が、という誰かの声と、一斉に回る風車に泣く子どもの声が入り交じる。祭り囃子、売り声、射的の音、肉を焼く音、甘ったるい飴の匂い、汗の匂い、人いきれ。

「委員長！」こちらでしたか。

副委員長が人に揉まれるようにして近付いてきた。

「沢田が、いないんだ」

「ですが、皿も祭壇にありますし、もう用は済んだのでは？」

相手はわからないという顔をし、委員長？ もう一度雲雀を見る。

「絡まれてるくらいなら別にいいんだ」

鳥居を見る。月のない空に、足下を照らされながら落ちてくる闇を支えるかのようにして立っている。参道はだらだらと続き、大階段の先にある本殿に近づくに従って人通りが絶え、駐車場の近くで花火は打ち上げられる。五年前に不審火で焼けた稲荷社の跡地だ。稲荷は移し、新しい社が参道をそれたところにある。

「僕だってわからない」

星の見えない暗がりに、切り裂くように一羽の鳥が飛んでくる。回るでもなくでたらめに飛び回るとすと鳥居に止まり、動かなくなる。雲雀に懐いている鳥はたいいていの夜は己の時間ではないとばかりに室内で跳ねるか、籠の中で丸くなっている。昼も夜もない鳥の環境による生態変化は都市部の問題にもなっているが、高いところから黒い影に睥睨されるのは雲雀としても気に入らない。

「ヒバリ」

赤ん坊だ、本当に何も知らねんだな、と確かめるように問うてくる。

「なにが」

「ランボが言うにはツナは自分から歩いて行ったそうぞ。誰かに気付いたみてーだ」

——カア：

仲間でも呼んでいるのか、鳥が啼く。

影が追い迫る。鳥居も雑踏も何もかもを呑み込んで、塗り潰された黒になる。

幻覚使いか、それ以上に来たくも顔を合わせたくもない人物がいる。

「あの子に、何をしたの？」

どこをどう風が通っているのかも知れないのにひんやりした室といい、入れば目眩がするほど長かったりする廊下とか、鰻の寝床みたいになっている造りそのものが雲雀には好きになれなかった。住まっていた老夫婦のことは嫌いではなかったが、それでも、通わぬよう関わらぬよう、避けていた。

「……」

現在の主となった男は若い。二十歳に至らずして家財一切を継ぎ、雲雀が物心ついた時分から此処に主としている。

「返して」

端然と床の間を背に座り、黙っている。まるで俗世とは関わりを断ったようなそんな振る舞いをする男は、雲雀の知らない

多くを知っていたし、心の中を覗き込んでほくそ笑むような卑しさが見えて、嫌いだっただ。

人伝てに主となった由来は聞いている、その年に好き合った相手を失ったこと、もう一枚の皿の皿を手に入れたこと。損じれば、陰と陽の皿は回ってくるが同時に二つはないと伝えられていた、そのときにはもう雲雀の手元には陽の皿があった、しかし、待つてももう一枚の陽の皿は回っては来なかった。本宮の夜、彼の恋しい人は目の前でまるで世界から投げ出されるように消えたという。そして陰の皿は割れて、皿は一枚になった。まるで、彼の恋人というのが歪みの帳尻でも合わせたような結末じゃないか、と思っただ。

「ただどそれは作った物語で、事実はそんなこととは関係ない。嫌がらせだ。幻燈だの、手妻だの昔からそんなのも得意だったから。」

「暑かったし、余りにも暇だったから、皿を出して、注いでみたんだ」  
男は雲雀をゆっくりと時間を掛けて見返した。

「お前も出していると思わなかった」  
「……」

腕を組み鬼は仕方ないな、と投げ遣る言う。お前も分かっているはずだ、あれは僕らの思う範疇にはない。

「僕のはせいぜい誤魔化すくらいのこと当でしかないよ」  
ざらついた声に胸が、頭が、ちりちりする。  
「心えたのは彼だ」

言つて男は立ち上がり、隣の間から本殿にあるはずの皿を持ってきた。

「お前の匂いがまつわりついてる」  
黒い皿の中には透明な液体が満ち、底には小さく白い物がこもりと落ちていた。その上を悠然と弧を描いて泳ぐものがある。うすく淡いひと色で描かれた蛭だ、

「沢田！」

沢田綱吉は生まれたての赤ん坊のように膝を折り曲げ、身じろぎもせず眠るように底に沈んでいた。

「彼は、捕まってしまった」

「……」

雲雀は拳を握り締める。

「バカだね、僕が此処にいる理由だつて知っているのだからに」  
可哀想にね、と男は憐れむように雲雀を見てから頭を垂れる。押し頂くように皿を両手で持つと、じつと中を見詰め、もう一度、可哀想に、と呟く。

「陰祭りに注意を怠ったお前が悪い」

あそこに本殿までの階段が見えるのに向に辿り着けないのは何故だろう。

しかもすごい混雑だ。ひとに溺れそうになる、みんなはどこだろう。ランボを見失ってからもうずいぶん時間が経っているような気がする。それとも最初に待ち合わせた鳥居の下に戻る

方がいいのだろうか。

「…沢田」

宵宮で花火を打ち上げる時間は決まっています、それを見たら解散するのも小学生のころからの決めごとのようなものだった。

境内で集まった氏子衆に酒が振る舞われ、大人達は残るが親子連れはみな帰る、夜の時間を明け渡すように、祭り囃子を聞きながら参道に背を向けるのだ。

「ヒバリさん？」

見ればヒバリは汗だけで、何をしてきたのか、服や頬に汚れまでついていた。

「あの、獄寺くんやリボンを見ませんでした？」はぐれちゃって…

「帰るよ」手。

「え？」

「迷わないように」

絶対に離してはダメだ、と雲雀は言った。

「振り向かないで」

「でも、もうすぐ花火が」

「出るから」

有無を言わさぬ強さでぐいぐいと引く。言うことを聞かないと咬み殺す、なんてことは言わなかった。強く草の匂いがする、手には泥と、掻いたような傷があつて襟足には葉のちぎれたようなものが見えていた。手が冷えている、乱れた息は細かく、まるで追われている小動物の焦りと怯えような震えがそこから滲み出ていた。

「ヒ、ヒバリさん！」

並盛で誰よりも強くて、負けすら認めないようなひとなのに。

「どうしたんですか？ 何があつたんですか？」

「君こそ！」

雲雀は小さく叫ぶように言う。彼のそんな強い話し方は初めてだった。

「何をやったの!？」

「やつたつて…」

頭上にはざりと羽音が聞こえて、雲雀の手の力がいつそう強くなつた。そして走り出す。

「罨の前に転ぶつても、誰かに与えるものなんて何一つ持つてないのも分かつてる。だけど、あの人が欲しがるものをやらなきゃこんなことにはならない！」

「食事をしただけです！」

人に何度もぶつかったりした、やわらかい何かを踏んで、転びそうにもなる。ざわざわする宵闇の賑わいの中で明かりのせいなのか、肩の線も輪郭も分かるのに誰もどの顔もよく見えない。掴んでいる手は本当に雲雀の手なのか不安にもなる。

——カア、カア…

「わわ、悪いことなんてしてません、少し話して、一緒に食事をしただけです！」

全体が黒いからだろうか、夜に聞くカラスの声はなるほど怖い。ぞくつとする。

「……」

「振り向かない！」

びんと引つ張られる。

「はっ！」

顔が歪みそうになるくらい苦しい、心臓から口が、でなく心臓が口から飛び出そうだ。なぜ参道は終わらないのだろう、鳥居が見えるのに、どうして、どうしてこんなに走っているのに辿り着けないのだろう。頭と身体がぐちゃぐちゃになりそうになったところへ君を、と雲雀の声がした。

「君を、取り出そうとして、あの人に皿を投げつけたのに、結局は僕がこんなところに来てしまった」

「……こんな、ところって。」

まるで幻覚みたいな終わりのない宵闇の中に閉じこめられてしまったというのか。何をしたか、ツナにはてんで覚えがない、雲雀が言うように渡すなんて持っていないのだ、ましてや初対面の男の欲しがるものなんて。

——どんっ

余所見でもしていたのだろうか、雲雀が一人の人影とぶつか。若い男だった、白っぽい浴衣を着、手持ち無沙汰に狐の面を持ち、境内の方を見ている。合わせからから覗く真つ赤な玉がやたらに目に付いた。

「ごめんなさい」ぶつかってすぐはぼんやりした目を向けていたが、我に返るや否や即座に謝る。はっきりしない人々の中で唯一見えたように思う。見たことがあるような気がするのだがどこで見たか記憶がはっきりしない、雲雀は黙って息を整えていた。

——カア……

羽音がする、ツナはびくりとなる。

「待ち合わせているのに、ちつとも来ないものだから」

赤い粒がふらりと揺れて艶やかに光った。もしかしたらカラスはこれを狙っているのかも知れないなどと考えた。でも、カラスには盗れないな、そんなことも分かっているツナは、夢の中にいるのだろうかと自分を疑う。

「皿が」

耳に、笹の葉が擦れる音がした。ひっそりと時間の落ちくぼんだ隙間に埋まったような家、細長い座敷に座っている男の人、そのひとは粉々に割れた皿の欠片を拾い集めている。

「割れてくれないかなって祈ってた」

あ、と思う。雲雀が威嚇するようにツナを背後に引き寄せ、身体を強張らせる。着物は汗でツナよりも濡れている。

「なんで、割ることを考えなかったんだらう」

男の人は淋しそうに呟く。

オレが割ったんです、とツナは口にした。男は得たり、という風に唇を歪めたけれど、慰めも責めもしなかった。何も話さなかったから息苦しくなってあの家まで行くことになったいきさつを、ぼつりぼつりと話した。聞いているのか聞いていないのかわからない素振りだったけど、全部をひっくり返るめた感想だらう一言が『バカだね』だった。

「……」

雲雀は警戒を解いたのか、こわばりを緩め、男の顔を見上げる。ツナの手を握ったままふん、と鼻を鳴らす。

「バカだね。いい大人がこんなところで迷っているから龍なん

かに囚われるんだ、さっさと戻ればいい。とぼちちはもう御免だよ」

——うん。

男は、哀しげに笑うと見えなくなった。溶けてなくなるように、ツナの体中の神経という神経を引き抜くように。

「ひ」

「なに」

「ひぎゃああああああ!!!」

「うるさい」

ぐいと引つ張られてとんと足を踏み出す、視界の隅に太い鳥居の柱があり、聞こえなかった虫の声と静まりかえった街路が見える。夜が深まった匂いがある、天頂には星が瞬いていた。そろりと振り返れば参道に沿って提灯の列に本店と雑踏、祭り囃子が響いている。何というか、いままで庄されてしづらかった全体の呼吸が整ったような気配すらある。おかしい。おやと思うと空いた手の中には割れたと思った皿がある。

「ちよっ…」それ以上は声にならない、顎をがくがくさせながら雲雀の視線を引くように手を握りしめて皿を突き出す。  
ああ、と雲雀はそれがどうしたという顔をする。  
「ひと色が足らなくて、戻し方を知らなかったんだ」  
「は？」

「この皿の絵柄は二色なんだよ、割れたうえに朱が落ちて困っていた」

雲雀は機嫌が良さそうにツナの手を離さずに歩く、これじゃあ迷子の延長みたいだととぼとぼ歩きながら思うがそれでもま

あいいやと考えてしまう。二日ぶりの雲雀らしい雲雀だから。

「…よかったですね…」背筋がぞくぞくしますけど。

「あんまりよくはないな」

「はあ…」

「今度は僕が陰の皿を割ったから」

何てことないように言う雲雀はやっぱ機嫌が良く、ツナは生きた心地がしないまま長い影法師を引き引き家路をたどる。  
「……」

また自分はある家の主に会うのでしょうか、とは聞かなかった。卯建のあるあの家には行くとしてももう二度と行けないような気がする。

あの家での夕食の後の記憶はない。気付いたら家の玄関で、ツナがあちらにうつかり置いてきたのは言葉だったようだけど、もう拾いにも行かない。紫陽花の脇に埋もれるようにしてある水甕をじつと見詰めている姿を思い浮かべる。

雲雀から離れないよう、近すぎないように歩く。

どこかの家の風鈴がりん、と鳴いて黙った。

水音がきこえる。

見慣れている家並みの、夜の景色がふいにゆらいだ気がする。空気の層が波紋のように広がって、やがて落ち着く。視線を感じるのだけど、それがどこからなのかも分からないから気のせいかもしれない。

——あのひとは結局、何が欲しいのだろうか。